

天火同人

～ ミックスジュースでなく フルーツポンチです ～
個性をすりつぶし、わからない状態で混ざり合うのではなく、
食感、色、味わいなど、それぞれの個性を生かしつつ、
混ざり合うことが真の共生社会につながるという。
全盲の金メダリスト 河合純一氏の言葉です。



全盲の金メダリスト 河合純一氏
〔東京新聞 TOKYO Web 2020/8/24 記事より〕

河合氏は生まれつき左目の視力がなく、15歳で全盲になりました。
パラリンピックの競泳で92年バルセロナ大会を皮切りに、
6大会連続出場して日本人最多21個のメダルを獲得。
現在は日本パラリンピック委員会の委員長の重責を担う。

個性を互いに生かし合える社会を理想とし、
差別や偏見のない真の共生社会の実現を目指す。
「オリンピックは“平和の祭典”とよく言われますが、
パラリンピックは“人間の可能性の祭典”です」という。

競技レベルを単純に比較するとオリンピックが「主」で、
パラリンピックは「従」というイメージになります。
しかし、違う目標をもつ選手が同じ競技場で技を競い、
それぞれの個性が尊重されるように運営されています。

それは日本独特の「神仏習合」の思想に近いものがあります。
「習合」は“融合”ではなく「重なる」という意味で、
「神社には神が」そして「仏閣には仏が」存在し、
決して神と仏が融けたわけではありません。

異質な相手を尊重するフレーズ 「知らんけど」

日本には古来より自然の山や巨岩を神とする神道がありましたが、
6世紀に仏教が入ってきた時、神道は「出ていけ」とは言わなかった。
ここで神道と仏教が重なり「神仏習合」となったわけですが、
これは世界中どこにもない日本文化の象徴といえます。

代表例では、日光東照宮の二荒山神社と輪王寺、
和歌山の熊野那智大社と青岸渡寺などが姿を残します。
「お宮参りは神道、葬式は仏教」という日本人の信仰形態は、
外国の人から見ると、あり得ないことに映るようです。

大阪の名物になっている電車の中で見ず知らずの人に、
「アメちゃんいる？」と声をかけてくるあのオバちゃん。
あの大阪のオバちゃんのフレーズに「知らんけど」があります。
「～やでえ」と断言した後に、「知らんけど」をくっつけるのです。

「自分はこう思っているけど、他の人がどうかは知らないよ」
という意味で、お互いの利害が完全に一致しないことの前提です。
人間関係において異質な相手を尊重する会話の習性でしょうか、
「知らんけど」も神仏習合の風土から生まれたのかも知れません。

多様化が進む企業も様々な個性と価値観をもった人の集まりで、
いかに異質な人と対立せずに、各人が力を発揮するか…。
特に幹部同士が対立すると、ヨコの部門間で確執が生まれ、
それは中小企業でも派閥に発展し、社員の心はバラバラになります。

対立がトップと後継者のタテの関係であれば、
親子や師弟の関係を越えた権力闘争になるケースもある。
人間関係のトラブルは経営者にとって避けることはできません。
トラブルに巻き込まれず、すんなり収まる方法はないものか…。

「志」を同じくするには 陰と陽の補完関係をいかに保つか

中国の古典 易経に「天火同人^{てんかどうじん}」の話があります。

「天」に向かって「火」が燃え上がっている様を表し、
「同人」とは、同じ「志」を持った仲間のことをいいます。
違う二つの存在が、同じ方向に向かうことの大切さを説いています。



ここでカギとなる「志」とは何なのか？
金儲けがしたい、有名になりたい、出世をしたい…。
これらは己の欲望を満たすものであり、志とは呼べない。
また、私利私欲が強い人間の集団はあっけなく崩壊してしまう。

「経営者の志」とは、己の欲望を捨て去った先にあり、

己の人生をかけた使命感に裏打ちされたものであって欲しい。
それは私心を捨て、公に尽くす「滅私奉公」の精神に溢れています。

ところが、どれほど素晴らしい志であっても共有するのは難しい。
「天火同人」の教えに沿って、経営者が志を掲げても、
またその精神を企業理念や社訓として打ち出しても、
社内で不協和音が聞こえてくるのはなぜなのか？

その解決のヒントが「神仏習合」の謎にあるかも知れません。
神と仏が「陰と陽の依存関係」で成り立っている状態です。
「陰と陽」は優劣の判定や、主従関係を表したものではなく、
相手との関係によってその役割が変化するという特性があります。

ある時は「神が陽」、ある時は「仏が陽」となり、
その都度、お互いが補完するような役割を担います。
このような関係であればお互いが異質な存在であっても、
同じ方向に向かうことができる、というわけです。

トップと後継者の問題を陰と陽の関係で考えてみましょう。
後継者が入社した頃はトップが「陽」で、後継者が「陰」ですが、
後継者が力をつけてくると徐々に「陽」と「陽」の関係に変化します。
さあ、ここでトップがどのように考え、後継者がどのように振る舞うか…。

経営トップもいずれは「陰」になって去ってゆき、
「陰」であった後継者もトップになれば「陽」になる。
「天火同人」は、陰になったり、陽になったりしながら、
その時にぴったりの助け合いをせよ、と説いているようです。

曲がったり ぶつかったりして 成長する

ワンマン経営では到底乗り切れない時代です。
デジタル戦略とリアル戦略、最新技術と伝統技術など、
戦略的な課題は多岐にわたり、求められるレベルも高い。

それらはすべて重要な経営課題となっており、
課題ごとに優秀なリーダーを置く必要があります。
とくに新しい時代を担う若い人の台頭が望まれますが、
それはフルーツポンチのように、個性ある人達であって欲しい。



人間の可能性を追求してきた河合さんはこう語る。

「見えなくなってしまう水泳の方が、非常に面白いですね。
見えなくて曲がってしまうこと、壁にぶつかってしまうことも含めて、
やりがいのあるスポーツになった気がします」

社内には人材がない、と悲観的に考えるのではなく、
時代が変化する今こそ人間の可能性を信じたい。
先を見ずに曲がったり、ぶつかったりしながらも、
たくましく成長する若い人にチャンスを与えましょう。

パラリンピアンは過去に何らかの喪失体験をし、
どん底から這い上がってきた精神力を持っています。
オリパラがいかなる形で開催されるかわかりませんが、
鋼のような精神力で難関を乗り越えていただきたいと思います。

長らく「陽」の立場で世界を牽引した米国でしたが、
中国の台頭により「陽と陽」の対立が鮮明になっています。
「天火同人」は困難な時代の教訓として語り継がれてきました。
近いうちに陰陽の逆転が起こるなら、平和裏に進むことを祈ります。

株式会社新経営サービス 田須美 弘 (R3.5)

▼ご意見・ご感想は直接下記までご連絡ください

E-mail: tasumi@skg.co.jp FAX: 075-343-4714

